

ヤナ・トネス パブリック・トーク

「Post Flesh Intimacy, THE AGENCY meets TOKYO」

開催日時：2017年3月23日（木）19:00-20:30

開催場所：森下スタジオ

本日はご来場下さりありがとうございます。そして、今回、レジデンシーにお招きいただいたセゾン文化財団にもお礼を申し上げたいと思います。

滞在期間の半分ぐらいを過ぎたところですので、本日、お話しする内容はリサーチの途中経過の報告になると思いますが、まずは、私が立ち上げた「THE AGENCY」というコレクティブについて、その世界観や活動内容をお話したいと思います。

パフォーマンス・コレクティブ、「THE AGENCY」について

こちらが「THE AGENCY」のメンバーの写真です。一番左から、ラヘル・シュプーラー (Rahel Spöhrer)、マグダリーナ・エメリッグ (Magdalena Emmerig)、私、一番右がベル・サントス (Belle Santos) です。2014年の末に立ち上げたコレクティブです。これからいくつかのイメージ画像をお見せしたいと思います。それらは私たちの世界観や美学を少しご理解いただくためのものです。

「THE AGENCY」はパフォーマンスのコレクティブで、ミュンヘンとベルリンを拠点に活動しています。このコレクティブでは、イマーシブ・パフォーマンス (immersive performance) と呼んでいる、ある種の没入型パフォーマンスを創作しています。いわゆる、古典的なステージがあって、観客がいるという形式ではなく、例えば、観客とアーティストが一对一で対応する、あるいはグループの形式で何かを起こすといった、どちらかという従来演劇のフォームよりも親密な関係性を持つものです。

これは私たちが実際に取り扱っているトピックにも繋がっていて、例えば、新自由主義と言われるネオリベラリストの世界におけるフォーマットを扱っています。例えば、コーチングであったり、ピッチであったり、あるいは代理店という意味でのAgencyの手法を用いています。それが、先程、お話しした親密な関係性とも関わっています。

なぜ、このようなネオリベラリズムに関心があるのかというと、例えば、ブランディング、キャンペーン、コーチングなど、私たちはネオリベラリズムの戦略やテクニックに囲まれて生活をしています。ある意味、毎日読むような小説よりもネオリベラリズムの戦略、あるいはテクニックの方が私たちに大きな影響を与えている可能性があると考えているからです。そして、それらと肯定的に向き合ってみよう、というのが私たちの試みです。

特にネオリベラリストのフォーマットと関わる「感情」に私たちは興味がありますが、例えば、先程お話しした写真において、何らかの雰囲気というものがある、その写真の中の男性は居心地がいい感覚を持っているのか、仕事をしているのか、それとももしかしたら彼女とネット上でチャットをしているのかもしれませんが、どちらにしてもここでは何らかのかたちで身体と物との関係性があります。そこで、私たちは、例えば、スクリーンというものと人間がどういった関係性を持つのか、といったことに関心を持ちます。

人との関係性を築くときに最初の出会いがスクリーンを通してである場合にどのようなサブジェクトがあるのか、あるいは、どのようにして企業が世代を動かすことができるのか、その場合にブランド力がある企業が私たちの世代を動かすのではなく、あるアイデアであったり、あるいはある感情が私たちの世代を動かすのであれば、それはどういったものなのだろうかと考えます。つまり、グローバル化された世界で、ということです。

それでは、なぜ私たちのコレクティブの名称を「THE AGENCY」にしたかということですが、キャンペーンやブランディングといった手法を用いるので、それらに相応しい名前だと思ったからです。それは例えば、何らかの仲介をしたり、媒体になったり、あるいは欲望を作り上げることを意図しています。

このような私たちの活動をもう少し詳しく説明するために、私たちの作品を事例に取り上げたいと思います。一つは『ASMR Yourself』という作品で、もう一つは『Love Fiction』です。

『ASMR Yourself』について

まず、『ASMR Yourself』からお話したいと思います。『ASMR Yourself』ではAgency、つまり代理店というフォーマットを用いました。お話を進める前にASMRについて説明したいと思いますが、おそらく、この言葉はドイツよりも日本の方が知られているかもしれません。ASMRというネット上の現象なんですが、ご存知の方いらっしゃいますか？YouTubeの現象で、2009年ぐらいに始まった現象です。これはYouTube上で発生したコミュニティに関わる現象で、その動画の中では囁きや、何らかの特定の音が用いられます。その動画を見た視聴者はその音、動画を通してとても気持ち良くなるというものです。カメラの反対側の人との何かとの関係から個人的に、自分に注意を払ってもらっているような安心感を覚えるようです。ASMRはASMRアーティストあるいはカメラの向こう側にいる人たち、つまり映っている人、あるいは作成をしている人がいて、視聴者に対して、あなたのことをとても大切にしていますよ、というシチュエーションを作っていくわけです。例えばセラピーのようなシチュエーションだったり、あるいは仮の恋人のような、彼女彼氏のようなシチュエーションだったり、見ている人と画面の内側と外側がとてもパーソナルな関係性を結んでいくというようなものになります。そこでは、YouTube上にあるアルゴリズムが適応されているのですが、視聴者は次から次へと動画を見続けることで、自分にとって一番適切なASMR動画が与えられるようになります。そこで、私たちがこの作品で考えたことは、それがライブのシチュエーションではどういうものになるのか、という問いです。そして、これが私たちの答えですが、この『ASMR Yourself』でもアルゴリズムを用いて、一人一人の顧客のニーズにあったものを提供することにしました。

こちらが実際の作品ですが、画面の右に写っている人が『ASMR Yourself』の顧客です。従来の言い方で言えば演劇を観に来た観客の一人です。そして、左側がパフォーマー、演者ですが、この設定では『ASMR Yourself』のエージェントの一人ということになります。そして、顧客にアンケートに答えていただくのですが、例えば、眠りの質はどのようなものかとか、ASMRの気持ち良いという感覚に繋がる手がかりを色々と聞き出します。

そして、次のステップですが、パフォーマーはASMRの専門家ということで、このASMRの専門家がロールプレイングを行います。病院やクリニックのような設定で、色々な音を聞かせて、どういった音に反応するのかを、医者のように調べます。言い換えると、ASMRの感情を引き起こすトリガーを探していきます。

『ASMR Yourself』という代理店では、数多くのASMRアーティストを扱っているということになっていますが、その次のステップでは、どのASMRアーティストが一番適しているかを話し合い、パフォーマーがカスタマイズしたロールプレイングを提供します。

例えば、理髪店のようなセッティングです。理髪店のような環境はASMRの感情のトリガーになると言われています。右側にヘッドフォンが見えますが、それが重要になります。とても少量の音、耳をすませなければ聞こえないような音をヘッドフォンで聴いてもらいます。このような一連のサービスを提供しますが、その後もE-mailで「サービスにご満足いただけただけでしょうか。また今後もよろしくお願ひします」といったお礼の連絡もしたりします。

この作品の事例から、ブランド戦略を扱っていたり、あるいは企業の形態を装っているのをご理解いただけただけかと思いますが、その他にも、どのように身体を使っているのか、あるいは感情を引き起こすアプローチを考えているのか、ということにもご理解いただければと思います。特に、ご覧いただけただけの設定はとても親密なものですが、それはサービスを基本としていて、それが本物の関係性なのか、または本物の関係ではないかもしれない、といったところも扱っています。

『Love Fiction』について

もう一つの作品のお話をします。『Love Fiction』です。それはコーチングをテーマに扱っています。一つのセッションが90分で、一つのセッションで25人の参加者にコーチングをするというものです。このように風船を膨らませたような特別な空間で行い、この空間を私たちは「ハブ」と呼んでいます。

この作品、『Love Fiction』はライフ・ランド(Leif Randt)という作家の小説で、『Planet Magnon(マグノンの惑星)』というタイトルの小説の世界観にインスピレーションを受けて創作しました。その世界というのは完全に分断された世界で、一人一人のライフスタイルにあったコレクティブがあって、自分と同じ人生の選択している人たちが集まっているが、それらのコレクティブ間は全く分裂されているという世界です。私たちの現実世界、現実社会においても、例えば、フィルターバブルという用語がありますが、そういったことにとっても近いのではないかと思います。

この『Love Fiction』の作品の設定では、そういった完全に分断された世界の中で一つのコレクティブにコーチングを受けます。そのコレクティブは特に恋愛であったり、人間関係を築くことについてスキルを持ち、そのスキルを伝授するというコーチングを行うのです。

まず、観客一人ひとりには感情のチェックインというのを受け、それからチェックインします。その後、風船のようなハブの中に入り、コーチングとセッションを受けます。ハブの中で色々なエクササイズを通してコーチングを受けるのですが、グループのシチュエーションで受けることもあれば、一対一、あるいは一組になって、といった様々なエクササイズがあります。その時々にはコレクティブの世界観に導入するためのピッチ、プレゼンテーションがあります。超ディストピアでもあり、もしかしたらそれと同時に超ユートピアかもしれない、というような世界です。

パフォーマーと観客の関係性

今、ご紹介した二つの作品から、パフォーマーとしての振る舞いが重要になってくるのではとお気づきの方がいらしたかもしれません。例えば、お互いをどう見るのか、ということです。私たちのパフォーマンスのアプローチとして編み出しましたが、それは人と人が向き合う時に直接目を見るのではなく、目の周りのどこか近い部分を見るようにします。例えば、Skypeで対話をするとき、完全に目と目を見合っただけの対話をしていません。そういうシチュエーションをパフォーマンスで作っていきます。なので、目をそのまま見ることはなく、目の周りのこのあたりを見ます。

この他にもう一つ配慮していることが、どのように話すのか、語るのかということです。特に、この二つの作品はどちらも言語を重点的に扱っている作品で、その時に新しい言葉を作り上げるということをよくやっています。その新しい言葉というのは、この仮想の世界の中、またはブランドでしか通用しない、新しい宇宙観、世界観の中でしか通用しないけれども、聞けばすぐにその意図が伝わるような言葉を開発しています。例えば、side effect intimacy、親密さの副作用みたいな、副作用としての親密性みたいな言葉です。

そして、こういったパフォーマンスに参加される観客は、結果としてとても親密に感じる、と同時にとても疎外感を感じるようになります。こういった相反する二つの立場が同時にあるというのは実はすごく気持ち悪いことですが、このパフォーマンスの中では砂糖で包んだかたちで提供します。超ディストピアであり、超ユートピアであると言ったのはそういう意味です。

以上から、私たちの興味や、活動の背景をご理解いただけたらと思いますが、その上で、滞在中の研究についてお話ししたいと思います。

滞在の研究・テーマについて

研究のテーマは「草食男子」と「親密さのサービス」ですが、まず「草食男子」からお話しします。このレジデンシーに申請したときに書いたことですが、草食男子とは何かという問いを書きました。草食男子と言われているものが、ムーブメントなのかそれとも何らかの現象なのか、それとも何かの病的な症状なのかというようにです。そして、草食男子ということに関して恐れを覚える人もいます。それは結局どうということなのかということを理解したい、そういう意味ではとても曖昧だと思ったからです。そうして、研究を始めましたが、やはり、この草食男子には数多くの定義があると思います。

様々な立場の人にインタビューをし、草食男子に関する定義や、それがどのように生まれた言葉なのかというアイデアを聞いています。そして、毎日、新しい視点を発見しています。

これまでの体験について少しお話したいと思います。今週は森岡さんと青山さんにインタビューをし、お話を伺いました。森岡さんは草食男子という現象について書かれた著者で、早稲田大学の哲学の教授でもあります。彼によると、草食男子は基本的にとても恥ずかしがり屋で、何よりも平和を好む人という話でした。女性と恋愛関係を持つことができる人たちです。私が思っていたような草食男子、例えばそのジェンダーの役割の問題や経済的な問題を抱えている男性ではなく、日本がある意味で平和すぎるために生まれた現象ではないかというお話でした。森岡さんは、草食男子を否定的に考える世代と同年代ですが、草食男子に共感を持っていて、最終的にはジェンダー間の平等に繋がるのではないかとお考えでした。では、日本のフェミニストは草食男子の存在をどのように考えているのかと聞いてみましたが、「日本のフェミニストは何も言っていない」というお答えでした。

私はインタビューが終わり、ある疑問を持ちました。草食男子と言われる傾向があつて、ジェンダー間の役割や関係性が平等になる可能性があるのにも関わらず、フェミニストが何も言わないということをとて疑問に思いました。

それをもう少し掘り下げる、あるいは次のステップに持っていくために、青山さんにインタビューをしました。青山愛さんという方はセックス・カウンセラーとしてお仕事をされている方で、過去にエステのお仕事をしていたり、SMの女王様のお仕事をしていたり、女優もやっている方です。そういう意味では身体の使い方をよく分かっている人で、また、スピリチュアルなアプローチを習得されている方でした。例えば催眠術や、山伏のスキルを使っています。青山さんに色々なお話を伺い、とても興味を持ったのですが、いくつか矛盾することも仰っていました。例えば、草食男子というのは、彼女の考えでは愛情に溢れ過ぎた、甘やかされた環境で育った人になりやすいのではないかと仰っていました。そのような家庭環境で育つと、恋愛あるいはその他の女性との関係性において、傷つきたくないようです。彼女がセックス・カウンセラーとしてカップルの治療を行うとき、男性が自分は草食男子でそれが問題だと思っている場合、まずはそのカップルの女性に催眠をかけ、そうすることによって、その二人の間のプレッシャーを少し軽減するようです。女性からの男性への期待が問題になっている可能性もあるようで、そういったものも少し軽減するようです。

私はその話に納得はしていません。そのような甘やかされた家庭環境で、ある意味、特権的な家庭環境で育った人になる可能性はありますが、本当に女性からの強い期待、強すぎる期待が問題になっているのか、問題は何かのようになっていくのかについては、納得できていません。例えば、森岡さんが仰っていたこの草食男子という現象ですが、社会の平等に繋がっていくのではないかという考え方があるのに対し、青山さんが仰っていた、すごく甘やかされた家庭で育ち、とにかく女性に傷つけられたくない男性になる傾向だという話を聞くと、それらが矛盾している気がします。

それから、今日、また混乱する情報を目にしました。それは、日本の草食男子に近い考え方が米国にあり、右翼のAlternative rightと呼ばれている人がいるそうです。通称、MGTOW (Man going their own way)と呼ばれていて、日本の草食男子と関係があるのではないという記事でした。私はそれを読んで、更に混乱しました。私はこのMGTOWが日本の草食男子と全然関係ないのか、あるいは反対のものか、もしくは類似するところがあるのかもしれないけども全然違うものだと思っています。すごく悪い言い方をすると、女性嫌悪のフェミニストの動きによって、自分たちの権力あるいは選択肢を奪われたと思っている人が女性と関係性を持ちたくない、という選択をする、そういう人たちのことを表す言葉として使われている印象です。

私としては、この草食男子という現象、あるいはムーブメントとしてのフィクションに可能性を感じています。とにかく両義的というか曖昧であることが重要であることが面白いと思います。例えば、米国の超右翼のAlternative rightの人たちからも、自分たちにも当てはまると考えられるのと同時に、もしかしたら日本のフェミニストもこれこそ私たちが今考えていることだと言われる可能性があるからです。そういう意味では非常にポテンシャルがあり、アーティストの視点からもとても可能性のあるフィクションなのではないかと思えます。

「親密さのサービス」

もう一つのリサーチのトピックは「親密さのサービス」です。草食男子という現象と、親密さを売りにするサービス業がもしかしたら繋がっているのではないかという仮説を立てリサーチをしましたが、それは間違っていたのではないかと思っています。

私が親密さを売りに出すサービス業と呼んでいるものは、例えば、添い寝カフェやレンタルフレンドというサービスや、メイドカフェ、ホストクラブなどです。私の過去の作品をご覧になっていただいたのでお分かりになると思いますが、こういったサービス業において、どのようなセッティングが行われているのか、言い換えると、どのような設定でサービスが提供されているのかにとっても興味を持ちました。そして、その中でどのようなパフォーマンスが行われ、どのような物語が使われているのか、使われていないのか。例えば、友達をレンタルするってなったときに、その背景にはどのような物語が作られているのか、作られていないのか。添い寝カフェも同じで、例えば親友と一緒に寝ているというセッティングなのかということです。

そのサービスのセッティングや美学の参考になるとしますので、フライヤーをまわします。左側に配ったのが添い寝カフェのチラシです、右側はメイドカフェの写真が載っているチラシです。このチラシで私が指摘したいのは、ここにおける美的センスというか美学ですが、とてもガーリッシュで、少女的なイメージがあります。しかし、それは女性を対象にしたサービスではありません。

添い寝カフェに行った体験をお話します。稲村さんと一緒に秋葉原に行き、どの添い寝カフェに入ろうかと色々見て回りました。添い寝カフェと一言と言っても、一つ一つ結構提供しているサービスが異なり、マッサージが含まれていることもあれば、体を洗ってくれるサービスがあったりします。最終的にはハグをしてもらった添い寝カフェに行きましたが、そこでは30分間学生服を着た女の子と一緒に過ごす時間を買うということになりました。

まずその設定ですが、エレベーターを降りた途端に、桃か何かのすごく甘い香りに包まれている匂いがしました。そこには沢山のオプションもあって、選ぶのが難しかったのですが、「フルラブ」というオプションを選びました。

その設定は、一つひとつのコースが細かく、手をマッサージするのか足をマッサージするのか、それともハグに重点を置いた時間にするのかみたいなオプションがありました。それから、コースを選んで靴を脱いでくださいと言われました。外から見ると中がどんな風になっているか分からないのですが、受付があり、中に入ると個室のような空間が仕切られています。女の子に連れられて一つのブースに入ると、そこにはマットレスが敷いてあります。ローションを使って、手をマッサージしてくれました。二つクッションがあったというのが重要だったと後で気づいたのですが、一緒に寝転がってもあまり近づきすぎません。それから、彼女のパーフォーマーとしての態度ですが、ものすごく丁寧に一つ一つのステップを説明してくれて、例えば「はい座って下さい」「はい次は手をマッサージします」「はい次はこうです」みたいな感じで、そして「寝転がりたいですか、座ってみたいですか」みたいなこともすごく丁寧に、一つ一つその説明をしてくれます。しかし、そういったすごくプロフェッショナルな態度とは別の一面を少し見たいと思って、彼女に上半身を上げてもらい向かい合いました。そうしたら、彼女のプロフェッショナルな態度が一転してすごく恥ずかしがりやになりました。

その後、稲村さんとこのセッションについて話をしたのですが、こうやってすごくプロフェッショナルな態度と一転してものすごくシャイな態度を見せるというのは、実はものすごくその関係性が本物であると思わせるようなテクニックなのではないかという話をしました。というのも、こうやって一つひとつステップを説明しながらプロフェッショナルの人に体験を提供してもらわなければならないのですが、もちろん自分も何が起こるか分からないけれども、相手も何が起こるか分からない、人間なんだなという面を見せるのがすごく面白いなと思いました。で、実際に私は何が起きているのかもっと見たかったので、寝転がった後に上半身を起こして彼女の方を見たんですけれども、彼女は「ちょっと目と目を見合うのは恥ずかしいから、お互い天井を見ませんか」と言いました。

そして、この中で一番面白いと感じたのはハグ、抱き合う瞬間でした。ちゃんと抱き合う瞬間があるパッケージを選んだんですが、そこに何分間抱き合うことができるかとかまで詳細に書いてあったかは覚えていませんでした。ある時に彼女が「では、ハグをしましょうか」と聞いてきたので、是非って答

えました。そこで、実際に何が起こったかという、二つのクッションとマットレスがあって、お互い寝転がり、ではハグしましょうかということでお互い上半身を起こして体を向かい合わせました。しかし、このクッション、マットレスとマットレスの間には距離があったので離れているところで一生懸命にハグをしようと手を伸ばすという感じで、すごく居心地の悪いハグでした。それも、彼女は絶対数えているなっている感じで、多分15秒だったと思うんですけども、15秒、彼女が数えて時間が過ぎて終わりました。ちょっとそれは短すぎると思ったんですが、これで終わりですということを伝えるために彼女は最後にありがとうと言いました。

私からのお話はこのぐらいにして、質問やコメントを頂ければと思います。

(以下、質疑応答略)